

「社長の器」が年々小さくなっていることに、非常に危機感を持っています。社長は、単に儲けたらいいのでしょうか？今の事だけでいいのでしょうか？自分（会社）の事だけでいいのでしょうか？

作家の三島由紀夫が一九七〇年に自死する前に書き残した文章に『このまま行ったら日本は無くなってしまうのではないか。日本はなくなつて、その代わりに、無機的な、からっぽな、ニュートラルな、中間色の、富裕な、抜け目がない、或る経済的大国が極東の一角に残るのであるうー』道義の頹廃した日本を、半世紀前に予測していましたが、残念ながら的中してしまいました。

国家とは何か、日本人とは何か、愛国心とは何か、我々社長が、今こそしっかりと自らに問い直し、明確なブレない確信を持つことが急務ではないでしょうか。

「会社経営の目的は、人を中心にする事」「アメリカ標準の経営から、日本独自の日本の経営へ勇氣ある転換を図ること」あるいは「傲岸不遜な、中国共産党の不当な圧力を毅然とした態度で跳ね返すこと」という、日本人として、我々経営者が闘う勇氣を持つことです。

そもそも仕事とは、「事に仕える」即ち、一旦緩急（まさに現下の日本の置かれた状況です）あれば、日本のために正々堂々と我が命を捧げることです。

そこで参考になる先輩社長が、国士「出光佐三」です。

「正伝出光佐三・日本を愛した経営者の神髓」展転社 著者 奥本康大 を是非とも熟読して下さい。失っていたものを発見できます。勇氣を貰えます。背中を押してくれます。不屈の闘志が湧いてきます。

「人間の真の働く姿を顕現し、国家社会に示唆を与える」「人間尊重」「大家族主義」を生涯貫き通した生き様に、感動しない日本人はいないでしょう。

親中派、媚中派の売国奴のような政治家が沢山います。白昼堂々と、外国のスパイが国内を我が物顔で跋扈しているのを許しているのが現状です。

ウイグル自治区のジェノサイド（民族大量虐殺）が公然の事実でありながら、中共の王毅外相は、「デマだ、捏造だ、内政干渉だ」と反省どころか猛反発しています。台湾と中共の間も非常に緊張して来ました。戦争になれば、アメリカは、沖繩から戦闘機が発進します。当然、中共は沖繩を攻撃します。日本は否応なく戦争に巻き込まれるのです。日本は、日本人が守る以外に無いのです。自衛隊では戦えません。軍隊に早急に格上げする必要があります。社長、もう「平和ボケ」は許されません。社長の器を大きくして参りましょう。

今月のポイント

大和魂を取り戻そう

